慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 カトリーヌ・ロブ＝グリエ『若き妻の日誌、一九五七—一九六二』
Sub Title	Compte-rendu de lecture Un essai sur “Jeune mariée Journal, 1957–1962”
Author	宮下, 理恵子(Miyashita, Rieko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.41 (2005.) ,p.27- 50
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20050930-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

カトリーヌ・ロブ＝グリエ『若き妻の日誌、1957–1962』

宮下　理恵子

アラン・ロブ＝グリエ夫人、カトリーヌ・ロブ＝グリエは2004年10月にファイヤール社から新婚時代5年間にわたる日誌を発表した[1)]。

裏表紙の説明によれば、“アラン・ロブ＝グリエの伝記への便宜”のため、彼女の昔の備忘録やノートの中から見つけ出されたものとある。

アラン・ロブ＝グリエ自身が2000年以降精力的に自伝的・回顧的著作やDVDを発表しており[2)]、このカトリーヌの日誌は、作家ロブ＝グリエの私生活上の詳細なエピソードを通して“公的な”回顧録を補う、作家の私的・心理的側面の生きた記録として興味深く読むことができる。

だが、アラン・ロブ＝グリエ自身の回顧録あるいは回顧的著作、及びこの時期の作品についての制作過程、ならびにこの日誌の多くのページを占める当時のフランス文人とのエピソードなどの詳細については稿を改めることにして、ここではカトリーヌ自身の新婚生活5年間の日常を、幾つかのエピソードを拾いながら、二十世紀半ばのフランスに生きた“中流庶民”女性の生活という観点から論じてみたい。

この日誌は全568ページに及ぶ大作で、1957年11月の彼らの新婚旅行から始まって1962年11月の記録で“突然”終わっている。

日常生活の瑣末な出来事から、実家と婚家での家族生活、夫アランとの数え切れないほどの旅行、そして勿論ヌヴォー・ロマンの作家や当時の著名文学者たちとの出会いと、時として彼らとのトラブル、またアルジェリア戦争最中における政治情勢や121人宣言への関与[3)]などが、文化的知識人の観

点からではなく、ごく一般的な庶民女性の観点から語られていることに、かえって時代の息吹が感じられる。

とりわけ興味深いのは、あたかもフランス映画にでも出てくるような既婚女性の不倫願望とカトリーヌ自身をも含めた幾つかの事例の具体的なエピソードが、控え目ながらもかなり生々しく語られている点である。

もっともカトリーヌ自身が結婚前にジャン・ド・ベルグなる仮名で『イマージュ』（1956）というポルノ小説を刊行している[4)]。この作品にはアラン・ロブ＝グリエ自身が P.R. のイニシアルで（この作品が献呈された『O 嬢の物語 Histoire d'O』（1954）の著者ポーリーヌ・レアージュ Pauline Réage の頭文字をとったとされている）序文を書いており、彼らの性的嗜好に結婚以前から共通性あるいは影響関係があったことが窺えるが[5)]、カトリーヌ自身はアランの“異常性癖”に戸惑いながらも、一方で外に愛人をつくることにかなり固執しているのだ。この点については詳しく後述したい。

カトリーヌ自身、中等教育はカトリック学校（Notre-Dame-de-Sion）で受け、高等教育は HEC（École des hautes études commerciales 高等商業専門学校）で、と取り立てて文学教育を受けたわけではないのだが、卒業後舞台女優、映画女優、スタジオカメラマンなどとしても活躍し、後年 1985 年には今度はジャンヌ・ド・ベルクの仮名で『女たちの儀式』[6)] を発表していることからも分かるように、早くから芸術活動を実践しており、結婚後も恐らく夫の職業についていくためでもあろうか、大変な読書家かつ映画愛好家で、そのエネルギッシュな活動振りには感嘆させられる。

《家族の中で》

夫であるアランは、作品に見られるようにかなりの韜晦趣味の持ち主であり、この日誌にも読み取れるように家ではどちらかと言えば寡黙な（講演などでの彼の能弁さからは想像できないのだが）、何時間でも机の前に座って仕事に没頭できる、几帳面で確実に仕事をこなす、偏執狂的な職人作家であるのに対して、カトリーヌは、一面で、お洒落とお菓子、ショッピングに明け暮れる“パリジェンヌ”のステレオタイプを具現化している。

この日誌の多くの部分が自分や夫、あるいは家族のための買い物への言及で占められていることは、現代の若いフランス人女性の共感を呼ぶのであろうか、それとも俗物趣味として反感と侮蔑感を引き起こすのであろうか。

ギャルリ・ラファイエット Les Galeries Lafayette、プランタン Au Printemps、エディアール Hédiard、といった現代の私たちにも馴染み深い商店の名前が頻繁に登場し、洋品、インテリア備品といった生活必需品そして高級食材などが次第に整っていく過程は、そのまま第二次大戦後十数年を経たフランス社会が経済復興に向けて始動している活気を伝えている。

筆者は正直なところショッピングにほとんど関心がないことからカトリーヌの購買意欲には脱帽させられるのだが、他方でこうした消費行動は決して自分自身のためだけでなく、夫や家族を喜ばせるためであることが読み進めていくに従って見えてくる。

家事については結婚前アランに対して、「私は何も、何も、何もしないわよ」と断固宣言していた彼女がその後の生活の中で、日々の家事、お客を迎えての料理、頻繁な旅行の手配と準備、夫の仕事の補佐と講演旅行への同伴等々、あらゆる面できわめて有能な“奥様”（bonne femme d’intérieur）であることを証明していく。

こうした家庭の主婦としての役割は、単にアランとの夫婦生活においてのみならず、両方の家族との親密な交流の中でも演じ切られる。

当時高齢ではあったがまだ健在の両親たち、そして双方の姉妹たちに対する献身的な心遣いは時として、カトリーヌを疲労の極地にまで陥らせる。ガッサンディ通り rue Gassendi に住むロブ＝グリエの両親（姉のアンヌ＝リーズ Ann-Lise と同居）あるいはレンヌ通り rue de Rennes のカトリーヌの両親（末の妹ソフィー Sophie と同居）のアパルトマン、ブール・ラ・レーヌ Bourg-la-Reine のカトリーヌの母方祖母の家、あるいはブレスト Brest のロブ＝グリエの生家、ル・グーレ Le Goulet やポンパドゥール Pompadour（Quercy）の母の隠れ家、等々の訪問とお茶や食事、これらは毎日の、そして週毎の生活リズムの重要な部分を構成するのだ。

ロブ＝グリエ一家からカトリーヌは実の娘のように可愛がられる。ガッサ

ンディ通りのアパルトマンでもブレストの家でも、彼女が家族の一員として大歓迎されていることはカトリーヌの誇張ではないだろう。ブレストの別宅ケランゴ Kerangoff 滞在中 カトリーヌはロブ＝グリエ一家のように DIY や庭作りにはあまり参加しないが、インテリア用品を含めて、日々の必要品の買い物などは一手に引き受けている。

常に大勢の親族や友人たちが出入りして騒々しく、また食事時間が不規則なこの家での生活はカトリーヌを疲れさせることはあるが、彼女が完全にロブ＝グリエの家族に溶け込んでいることは日誌の全編を通して見て取れる。

以下に見ていくのは 1960 年 8 月 16 日、日曜日の日誌である。

> 私の到着以来、1 日中雨降りだった 2 日間を除いてお天気が良かった。プールの傍に座って本を読んだり、ドイツ語を勉強したりして午後を過ごす以外は、私は町へ買い物に行く。絨毯を選んだり、家に足りない食器や小さな家庭用品を買ったりする。夕方アランの小説をタイプで打つ。急がなければならない、月末には終っていなければならないだろう。それが終ると夜になり、私はカーテンを引く。アランが居間の暖炉に火を入れる。そして私は夕食まで読書する。この家では夕食は 11 時か真夜中以前になることはない。（『日誌』p. 202。以下カトリーヌの日誌からの引用は左記の表記とする）

こうしたアランの家族そしてカトリーヌ自身の家族との交流の記録はこの日誌の中で最も興味深くまた多くの女性読者の共感を呼ぶ部分であろう。

実家ルスタキアン Rstakian 家の人々にとっては最も頼りになる長女であり、両親や二人の妹たちとの交流—アドヴァイスやプレゼントの交換、父親の転職についての気遣い、郊外に住む祖母の家への訪問（庭の果樹の取り入れと手入れが目的のことが多い）等々、カトリーヌは実に良き娘として振舞う。

どんなことにも最善を尽くし、自らの過労も顧みないカトリーヌが Le Goulet（Loire-et-Cher 県）にある母親の隠れ家で過ごす数日の描写は、カ

トリーヌが実母の傍で如何にリラックスして過ごしているかを正直に明かしている。

恐らく嫁いだ娘にとって最高の休息の時間であろう。少し長くなるが、引用してみたい。

> ボージャンシー Beaugency から ル・グーレまでの 16 キロは何処までも続く何もない野原である。家は、数キロに亘って村も商店もない一軒家で、家の前は見渡す限り小麦、大麦、カラスムギの畑である。後ろは 3500 ヘクタールの森、静寂そのものだ。最も近い家もトマ一家という、ごく静かな二人の年とった農民が住んでいるだけである。
>
> ここには快適な設備はほとんどない。寝室にはベッドが 1 台、椅子 1 脚、汚水バケツがひとつ、家具はそれだけ。マントルピースがナイトテーブルの代わりになる。ワンピースは壁の釘に掛ける。台所の大きな円テーブルが何にでも使われる。食べ物はキャンピングガスで温め、1 日 1 回、深さ 50 メートルの家の井戸から水を汲み上げる。冬には、火を焚かなければならないことになるから、もっと大変なことだろう。
>
> 時間の使い方は単調だが心休まるものだ。11 時に目覚めるとすぐに、私はお茶とドライケーキの朝食を取り、そして夜まで、読書をしたり、ママンと話をする。天気が良ければ外で、寒ければ中で、昼食と夕食を間にはさみながら。時折夕食前に、私たちは散歩に出かける。森は嫌ではないが、マダニが群がっているので、私は畑沿いの小道のほうが好きだ。一昨日私たちは、ここから 3 キロ先にあるサン・ロラン・デ・ボワ Saint-Laurent-des-Bois まで手紙を投函しに行った。小さな感じのよい村で、スレート屋根の古ぼけた教会の隣にマッチ箱のような家が 1 軒、それに夕日に照らされて少し黄土色に輝いた日に焼けた瓦屋根の、石造りの家が数軒あり、家の周りにはグリーンピースやインゲン、パセリなどの手入れされた花壇のある小さな庭にバラ、カーネーション、タチアオイといった幾種類かの花々が目を楽しませていた。誰もいないかのようだ。幾人かの子供たちが、教会前広場の 3、4 本の菩提樹の

古木の下でボール蹴りをしていただけだ。静かで感動的だった（中略）私たちは朝となく夜となくラジオを聴いている。このアルジェリア戦争は終わることがないのだろうか。

私は休息している。心配ごともなく、頭の中に縞模様も現れない。ここを出発したくない。でも、遅くとも金曜日の晩には帰らなければ。土曜日にはブール・ラ・レーヌのお祖母様の家と洋服屋に行かなければならない。（『日誌』p. 287–288）

《旅のメモ》

ヌイイー Neuilly に住む若い妻にとってパリ市内と郊外あるいは地方への移動は心楽しくはあっても過労をもたらすものであっただろう。更にほとんど夜毎の映画鑑賞あるいは外出。カトリーヌはこうした日々の細かい行動をひとつひとつメモしていた。あるいは数日間、数週間の空白を後日に遡って追想していくこともある。

とりわけ遠方への旅行、1961 年 7 月から 10 月にかけての第 1 回目の日本訪問をはじめとする香港、タイ、インド、イラン及びイタリア国内を巡る長期旅行[7]、あるいは 1960 年 10 月 16 日から 12 月 14 日にかけて、及び 1962 年 5 月 28 日から 7 月末にかけての、映画『不滅の女 *L'Immortelle* 』（1962）の現地視察及び撮影ロケのためのトルコでの長期滞在[8] などは、メモを元にして後日書きまとめられたものである。もっとも単に日付を追って記述されているのではなく、時間が前後に飛んでるので時間を再構成しながら読み進めていかなければならないことはアランの作品と同様である。

前者の日本滞在については 14 ページに及ぶ詳細な回想録となっているのであるが少し触れてみたい。

当時大映との間で企画されていた市川昆監督による日仏合作映画の打ち合わせのため、アランとカトリーヌは 1961 年 7 月 27 日にパリを経ち日本へ向かうが、途中経由地のハンブルグ空港で彼らが乗っていたボーイング 707 の爆発炎上事故に遭遇し、二人は九死に一生を得る。

合作映画の制作については、1961 年 6 月に市川昆監督が直接ロブ = グリ

エ宅を訪れ、フランス＝ソワール紙の三面記事に主題を取った恋愛悲劇のシナリオを依頼してきたものである。当時『マリエンバード』の個別上映会と刊行用シナリオ校正に専心していたロブ＝グリエは、一方で 1960 年より、後に『不滅の女』（1963）として完成されることになる映画 *Les Chiens* の企画に頭を悩ませていた時期でもあった。

この年、1961 年はまたロブ＝グリエ夫妻にとって極めて多忙な年であった。

1 月には南フランスのベジエ、ペルピニャン、モンペリエ、ニームを巡る一連の講演会を終えた後、2 月にはマルグリット・デュラス、ナタリー・サロートと共にイギリスへの講演ツアーに参加する（カトリーヌは後半の 4 日間だけ合流。カトリーヌが講演旅行に同伴しないことはこの夫妻にとってめったにないことだった）。

日本では 2 週間に及び東京、京都、奈良、鎌倉などを巡り、香港、バンコク、デリー、テヘランを経て 8 月 26 日ローマに到着、1 ヶ月振りにヨーロッパに戻る。その後『去年マリエンバードで *L'Année dernière à Marienbad* 』（1960）を出品中のヴェニス映画祭出席のためヴェニス、コルチナなどを移動し彼らがパリに戻るのは 10 月 1 日のことである（大映との合作計画は結局、シナリオや出演俳優の調整がつかずに実現しないことになる）。この間香港では後の『快楽の館 *La maison de rendez-vous* 』（1965）の元となる場所を発見したとされる。またテヘランではカトリーヌの父方の親族と会う。

私たちが関心を持つのは、彼らの日本での行動と感想である。

訪問各地で訪れたモニュメントについてのカトリーヌのメモは詳細で、鎌倉の建長寺、鶴岡八幡宮、円覚寺、長谷の大仏、京都の桂離宮、西芳寺、金閣寺、大仙院、銀閣寺、平安神宮、清水寺、奈良の東大寺、法隆寺、薬師寺、唐招提寺、等々、また吉原をはじめ浅草フランス座、新宿の繁華街やストリップ劇場等、2 週間の滞在中、目一杯観光旅行を試みている。因みに、カトリーヌは旅行先でしばしばアランのストリップ劇場通いに同伴していることは、先の『イマージュ』を巡るエピソード、また後のエロチックな映画制作におけるアランとカトリーヌの協力関係を知る読者にとっては想定済みのことで

はあった。

ところで、初めての日本滞在では、特にホテルのエアコンと日本食には馴染めなかったようだ。外気温が35度36度という高温の中、当時としては贅沢な設備であるエアコンはカトリーヌとアランにとっては辛かったとある。「アランは汗だらけで帰ると、“冷凍付け”のホテルのロビー、部屋あるいはレストランで、いつも風邪かリューマチに罹った」と言っている。

日本食についても、しばしばカトリーヌのレシピには魚介類が登場するにも拘らず、海老や魚の天ぷらについてはともかくも、全般的に「のどを通りにく」、刺身や寿司は「大嫌い」、すき焼きも「好きではない」、あるいは上野で食べた饅頭（または団子？）については端的に「まずい」という感想が述べられている。

大仙院で茶の湯の手前を見た際にも、音を立てて茶を吸い込む行為といい、茶碗を丁寧に拭う所作といい、自分たちから見れば“非常にしつけが悪い”とみなされることばかりで、“滑稽である”と評しているのは、一人カトリーヌのみならず、当時の一般的なヨーロッパ人の感じた印象であり評価だったのであろう。

異文化交流が盛んになった今日、世界中で寿司、刺身、天ぷら、すきやきなどが賞味されているが、食文化の受容には、ある程度の文化的知識と寛容さに加えて人間的幅の広さが必要であることを感じさせられる記述である。今日ではその後の幾度かの来日の経験から日本食に対するカトリーヌの評価も改善されていることを希望するが、筆者の知る60年代の在日フランス人の一般的な姿勢と大差ないことも注目される。

カトリーヌは自身が嘘が大嫌いな性格と言い切っているが、時として行動に表れる自らの大人気なさを反省することがある。

トルコではあるレストランで同席者2名とアランとの会食のとき、出された“ヨーグルト付きケバブ”を「まずい」と言って断固拒絶し不満を隠さなかったことを後でひどく後悔している。

もっともカトリーヌの偏食振りはかなりのもので、招待客があると長時間をかけてフルコースを準備できる良き主婦ではあるのだが、関心があるのは

ケーキや甘味類であるらしい。日々の食事でも軽食と菓子類で済ませている場合がかなり見られ、パリジェンヌの食生活の一端が読み取れることも興味深い。

アランとカトリーヌ夫妻の資料管理の見事さは、先述の回顧録『ヌヴォー・ロマンの旅行者、図版入り年譜 1922–2002』（前掲書、註 2）参照）を瞥見しただけでも見て取れる。この年譜は 2002 年 5 月 2 日 –6 月 25 日にカーン Caen の Abbaye-aux-Dames で IMEC（Institut Mémoires de l'édition contemporaine 現代出版保存研究所）主催により開催された同名の展示会記録である。

家族や交流した文学関係者たちの写真は言わずもがな、国内外のヌヴォー・ロマン関係講演会を報道した新聞記事の切り抜き、自筆原稿及び下書き・メモ、各国で出版されたロブ = グリエ作品の翻訳版写真、レニングラードのホテルの宿泊票に至るまで、詳細綿密なコレクションが開示されている。因みに掲載されているロブ = グリエの直筆はすべて解読可能であるほど達筆で、アラン・ロブ = グリエの人となりがはっきり表れた著作となっている。

これら資料の中には、カトリーヌの協力なくしては実現しなかったであろう綿密な日々のメモが大きく貢献したであろう記事が多く見られる。

かつて、『マガジン・リテレール』誌ロブ = グリエ特集号の中で、カトリーヌはインタビューに答えて、自分の補佐としての役割のひとつについて次のように語っている。

> 私以外の誰が、厳密に自伝的なこととそうでないこととの区別を知らせることができるのか分かりません。万事がそれほどに入り混じっているのです。同じように、彼の人生の詳細な年譜を共にすることができるのも私しかいないと思います。アランはメモ帳を持っていませんし、何もメモしないのですから。私は何でもメモします。いつも一緒という訳ではないので彼の人生の年代記作者にはなれませんが、私の個人的な小さな手帳、3 ヶ月毎の手帳ですが、それに私たちの移動や旅行のことを日々書き留めていますので、それで連続性をはっきりさ

せることができるのです。他にも、読書のメモとかパリでの論戦とか私の生活についても書き留めています。それらの手帳はIMECのロブ＝グリエ資料館に預けてあるのですが、私の死後でなければ刊行されないでしょう[9)]。

上述の『ヌヴォー・ロマンの旅行者』中で最初にカトリーヌの写真として掲載されている20歳代のカトリーヌの写真は『日誌』の表表紙にも採用されているが、せいぜい15歳ほどにしか見えない幼顔はその後の結婚生活においても多くの滑稽なエピソードの原因となり、アランもカトリーヌもその事態を楽しんでいる。

二人が結婚した1957年当時、アランは35歳、カトリーヌは27歳であったにも関わらず、行く先々で10代にしか見られないカトリーヌはアランの娘と取り違えられ、このカトリーヌの存在がアラン・ロブ＝グリエのロリータ趣味の証明とされたこともある。

アランとカトリーヌの接点は何処にあったのだろうか。ロブ＝グリエの作品とカトリーヌの『日誌』の中にその航跡を辿ってみたい。

《アランとカトリーヌの性生活》

彼らの出会いは1957年夏のことだった。「ロマネスク」の最終巻『コラント最後の日々』（1994）に二人の最初の出会いが語られている。

私がはじめてカトリーヌにあった日のこと、彼女は子供のようなふくれっ面と小像のような小柄さから、そんな歳にはとても見えなかった。パリのリヨン駅でのことだった。彼女は、シンプロン・オリエント方面行き出発間際の車両入り口の開いた戸口に立っていた。私は、クシェットもないコンパーチメントの中で、ブルガリアのビザもないのにザグレブ、ベオグラード、スコピエ、サロニカ、アレクサンドロポリス等、幾つもの行程を経てイスタンブールまで私たちを連れて行くことになる長く厄介なこの旅行を、私たちがずっと共にしなければ

ならないことを知っていた。つまりはステップの上に極めて雑多な我々グループの一員として名前さえまだ知らない可愛い小さな娘がいたのである[10)]。

大学生のツアーで出会ったこの少女をアランは6年間追い回し、見事に思いを果たす。アランが如何にカトリーヌに夢中だったかは、『日誌』の全編に亘って“カトリーヌはどれほどアランに愛されているか”という宣伝のように表れている。

『日誌』の1ページ目は次のような文章から始まっているのだ。

1957年11月1日金曜日パリ

アランは少年のように恋している。35歳にしては少し馬鹿なことだし（というよりむしろ、自分でそう思うか、他人からそう思われるかどちらか）、従って私たちの結婚前にはアランはずっと慎み深かった。1週間前からまるで人形相手のように私と遊んでいる。私たちの私的“契約”によって、かれは私の主人であり、私はいつでも言うことを聞く彼の小さな奴隷なのだ。だが次第次第に彼のほうが奴隷であるように思われてくる。私のどんなに小さな移り気もキャッチして、部屋から部屋へと仔犬のように私の後をつけ廻し、私の反応を窺っているのだ。彼はいつも口実を作っては私にキスし触りに来る。彼は触ったり、眺めたり、讃嘆したりする新しい玩具を手に入れて、それと遊んでいるのだ。彼の妄想は膨れ上がる。彼はもうそれしか考えない。だが、私に言っていたよりもずっとサディストではない。彼が望めばできると考えると、私は怖くなるが、彼にはそれで充分なのだと思う。彼は私を苛むと同時に甘やかす。自分の玩具を駄目にしてしまうのではないかという恐れが多分彼を引き止めているのか、それともむしろ過剰なまでに嫌なのだろう。（『日誌』p. 11）

“ご主人様の奴隷”ごっこが問題となっている日本の現状では、これを実

践のモデルとして文字通り読むと危険なプレイごっこであるが、『マガジン・リテレール』のインタビューに答える先のカトリーヌの言葉にあるように、彼らは、“実行よりもずっと幻想と頭の中で生きている”のであり、一部分はカトリーヌと実行したにせよ、“頂点までは達していず、それこそがファンタスムとして残る”（前掲記事、註 5）参照）というのが、彼らの良識であり、また真の小説家たる所以なのである。

アランとカトリーヌは時折トリプルプレイを試みようとし、ミニュイ社主幹で二人の親友であるジェローム・ランドンが一時期そのターゲットとなるが、カトリーヌの拒絶とアランの心変わりせいで結局罪のない企てに終ったようである。

1959 年 11 月 17 日の日誌には次のような記述が見られる。

> J に会ったら、すぐにアランに手紙を書いてすべてを詳しく語らなければならない。
>
> 魅力的なゲームだ。そこでは各パートナーが演ずるべき明確でデリケートな役割を持ち、すべてが冗談 badinage に基いて調整される。一切の感情は前もって原則的に排除されている。とは言え、どれほど小さな過ちもささやかな違反もすべてを崩壊させてしまいかねない。J の役割は私やアランのものと同じほど難しい。明日、J は多分私の愛人になり、アランはそれを知るだろう。にも拘わらず、1 ヶ月後にはエトルタ（ジェロームの別荘の地）でジェロームはもう私の友人に過ぎなくなっているだろう。アランは何もほのめかさないだろうし、ジェロームも同様に何も。私も疑わしい言葉を発したり怪しげな目つきをしたりせず、すべてが一見して秩序の中に戻ることだろう。だが、私たちは三人とも“知っている”だろう。私は沈黙の共犯が好きだし、危険なゲームが好きだ。（『日誌』p. 194）

後にカトリーヌが、彼らと同名の二人の若者アランとカトリーヌと、今度は四人でのプレイを計画するのだが、その結果はこの日誌には書かれていな

い。

何故カトリーヌが自分の愛人を持つことに執着するようになったのか。1958 年 11 月 13 日の日誌には、新婚 1 年目の夫婦の、既に倦怠期のような次の状況が語られている。

> 私には愛人が必要となるだろう。奇妙なことに、私たちの精神的な親密さが強まれば強まるほど、肉体的なむつまじさが崩れていく。それは運命的なことだ。だが私の生来の無自覚がほとんど常にこの潜在的なドラマを忘れさせている一方で、ひとつの考え、ひとつの空しい試み、A とのある会話といったものが、それを前にもまして生々しく解決し難いものとして湧き上がらせる。すると私たちは悲しくなり、時として、共に涙を流す。私たちは何が起きるのかを知るべきだったのだ。ひとつの神話が変質するとき、それは急速に崩壊する。
>
> A は私に言う。一人でいるとき、自慰行為をしているときでさえも、もううまく虚構の世界を作り上げることができない。彼の想像力は相変わらず生き生きとしてはいるが、神話は魅力を失い、イメージはもう同じ力を持たないと言う。そしてそれは私のせいで、明らかに、彼が“主人”であると私がもうそれほど信じられなくなっているからだと言う。ところで、もしも彼がもうそれほど主人でなくなっているならば、彼はもう全く主人ではないのだ、と彼は言う。彼には絶対が必要だ、と。彼は中途半端に甘んじることはできないからだ。こうしたことのすべてが彼を悲しく、不幸にしている。私が不幸であるならば彼は自分に罪があると感じ、私に立ち去るように提案し、愛人を見つけに行くように言うのだった。何と非合法的な解決案だろうか！ 私が愛しているのは A なのだ。それに私はドラマや不幸の才はない。私はそれを吸収し、適合させる。否認し、期待はするが、絶えざるドラマの中で生きることはできない。彼が有無を言わさず公に断言していることとは逆に、本当のところテクニックを信じてはいない、とさっき彼は言った。彼は世界観とそれに合うテクニックを信じているが、純

然たるテクニックは何の役にも立たない、と言ったのだ。“僕は形の意味を信じる、内容の意味ではなく”と言った。彼のライバルの誰かが知ったら驚きそして勝ち誇るだろう。(『日誌』p. 98)

この長い記述の中に当時のロブ＝グリエ夫妻の微妙な心理状態の違いが見られる。アランには単調さと日常性の中の“波乱の無さ”が耐え難いのだ。彼には想像力と創造力をかき立てる刺激的な何かが常に必要であり、カトリーヌはその理想的なアイドルだったに違いない。愛とは穏やかで甘いばかりのものでなく、男を想像力の極限にまで追い詰めるもの、ぎりぎりの頂点で創造を噴出させる契機となるものでなければならない。第三者の登場はアランにとって自身の創作活動に不可欠の緊張をもたらす“永遠の三角形”の必須要素だったに違いない。一方カトリーヌにとってアランは夫であると同時に父でもあるような、経済生活の基盤と家庭内での一定の自立を可能にしてくれる庇護者だったのである。どちらかと言うと倹しい家庭に育ったカトリーヌにとって、日々の自由な買い物や多くの外出、結婚前からの演劇活動の持続、多くの文人たちとの交流は彼女の自尊心を大いに満足させたであろうことは想像に難くない。見知らぬ他人から、そして家族からも“お嬢ちゃん”扱いされることにも不満を感じるどころか、楽しんで利用している節がある。恐らくアランの掌中で遊んでいるというのが彼女の心境だったのであろう。

だが、アランは一方で少女のようなカトリーヌの無邪気さを愛しながら、他方ではもっとより積極的に性的妄想の共犯者となることを望む。彼にはひとつの世界観を具現化する“形 forme ”が重要なのだから。“サドマゾ共犯契約書”は署名されないままカトリーヌの引き出しに仕舞われており、彼女は一部分アランの要求を受け入れながらも自分を拘束することを是認できない。以下にアランの性癖とカトリーヌの戸惑いを赤裸々に記述したページがある。

1959 年 6 月 17 日、ポンパドゥールの母の別荘での省察である。因みに、実母の傍でカトリーヌは実に落ち着いて長い日誌を綴っている。先述のル・

グーレでの描写と同じくかなり長い引用となる。

6月17日水曜日、ポンパドゥール

私はアランに近づこうと試みる、ができない。私は火傷や平手打ち、殴打といったものを我慢できない。アランが私をサディスムの欲望に服従させようとするや、少し経つと、私はヒステリックに笑い出してしまい、彼はすぐに止める。私たちの間には共通の領域、愛撫のそれがあり、そこでは素晴らしく仲むつまじい。それからそれぞれが固有の欲望をもっており、どちらも互いの欲望を満足させられないでいる。私が何日か前にそう思ったように、アランは決して正常な男ではないし、私は彼が期待していたような完全な奴隷には決してなれないだろう。この夏アランが書いた契約書は相変わらず私のライティング・ビューローの中にある。私はそれに署名をしていない。第一それに署名したとして、私が肉体的にすべて耐えられなければ何の役に立つというのか？ とは言え、私が欲し、感じていること、それはアランが私に対して持っていた肉体的情念が、使わない筋肉が当然のことながら萎縮していくように、少しずつ静まっていくことだ。

結婚前には私はアランからの多くの肉体的屈辱を受け入れてきた。いつの日か、私が彼の女、彼の所有物である妻になることがすべての前提となっていたからである。ナイーブだった私は決して疑いもしなかったことだが、彼の心理的不能は（6年間もあれば、経験豊かな女だったら誰でも、様々な兆候から発見したであろうような心理的インポテンツ、そう言えば、アランは6年間愛撫に限った性関係という私の願いを非常な熱意をもって受け入れ、6年間決して違反せずに約束を守ったのだったが）、私にとって極めて残酷な新事実だった。私たちは、私は特に以前と同じようにできるかのように考える振りをした。私は誠実だった。だが、私にとって、アランはもう“大文字の男（男の理想）”ではないのだ。事実、滑稽で、愚かしく、失礼なことだ。私は幾度となく繰り返し自分に言う、だが、染みは消えないのだ。動作や言葉は

同じでも、魔術は消えてしまった。もう今では私は虐待を受け入れられない。私は考える、これは一時的なもので、いつかすべてを以前のように回復させるような何かが起きるだろう、多分新しい秩序に慣れるだけでよいのだ、と。

私は多分自分を騙そうとしているのだ。私たちの共通領域、愛撫の領域では、私たちは言葉にできないほどに仲がよいだけに、いっそう奇妙なことだ。その場では素晴らしい。だがそれから数日経つと、アランが、いつもの幻影を想像しながら一人で自慰しているのを知る。普通、私は非常に忙しく、しばしば疲れているので、そのことはほとんど考えない。時折、消し去るのが難しい苦悩が襲ってくる。それに、私は自分が我儘すぎると思う。実のところ、私たちのむつまじさは肉体的には多くの夫婦以上にリアルであると言えることを私は知っている。

私は完璧嗜好であり、それだけなのだ。アランは私より単純で、私より満足している。彼はものごとがこんな風にして完全になり、満たされない情念は最終的にはその重要性を失う、と考えている。

彼の欲望は結局少しずつ消えていくか、アランが私を彼の“小さな奴隷”にすると考えたときに初めて離れることのできる領域、すなわち孤独な自慰の中で実現できる夢の領域に合流していく。アランはこうしたすべてはこんな風にあれば充分で、実現されないことは実現不可能であるべきだったと思っているのだ。

私はそれほど諦めが良くない、何故なら彼を愛しているから。何と複雑なことか！ 何故私は自分の体をもっと容易く自分が望むようにできないのか？ そして、それでは何故期待し続けるのか？（『日誌』p. 168–170）

ボヴァリスムは古今東西既婚女性に共通した志向であるが、カトリーヌの場合はすべてを夫に明らかにしながら、冬のリゾート地あるいは夜のブーローニュの森でのアヴァンチュールを、そして映画館で知り合った既婚男性

との密会などを試行するのである。

ところで、この日誌の最初からカトリーヌは過去の婚約者（fiancé とあるが正式の婚約者ではなく、スティディーな恋人だったようだ）ジャン T の行方を追い続けている。外務省勤務のこの青年は時折手紙だけは送ってくるものの、決してカトリーヌに会おうとはしない。

ベルリンへの講演旅行の件で外務省を訪れたカトリーヌはついでにジャンに会おうと試みるが、先ずは在室中と言われ通された後で、守衛から“嘲るように”不在と言われ、屈辱感に苛まれて外務省から走り去る。

> このコメディーはいったい何？ あれらのラブレター、そして小さなプレゼントの数々の後でこの下品な仕打ち、侮辱は何なのか？ ケ・ドルセを出るか出ない内に私は考えを変え再び戻って下の案内係から電話を頼んだ。今度私に答えたのはジャンの同僚だった。北アフリカへ 1 週間の予定で出発したと言う。証拠は出た。ジャンはめったにパリを離れない、彼はいつも旅行中の振りをしているのだ。何故？ 単に誇りからだとしても私は驚かないだろう。彼と知り合った頃、彼は人も羨む身分だった、お金もあり車もあった。私たちが別れた時（と言っても、1 度も絶縁したことはなかったのだが）、ジャンには悩み事があった。彼の暮らし向きがかなり悪くなったのだ。後になって、新聞で彼が金銭的苦境にまで陥っていたことを私は知った。あれほど自分の方から会いたいと言っているのに、私を拒むのは見栄からなのか？ メトロに乗るところを私に見られたくないためなのか？ 彼の性格ならば充分あり得る。だが明日、ことをはっきりさせるために彼に手紙を書こう。私が旅行を口実に彼に会いに来て拒絶された、などと彼に考えて欲しくはない。私が彼の後を追いかけていればご満足でしょうが！ こうしたことすべてを前もって見通すべきだったのだ。私はばか者だ。（『日誌』p. 229）

後に 1960 年のトルコ旅行中偶然に外務省でジャンをよく知っていたとい

う女性と出会い、消息を知る。当時彼はある金持ちの未亡人と結婚しながら、カトリーヌにも思わせ振りな手紙を書いて寄こしたのだった。この事実を知ってカトリーヌはこの過去の恋が“終わった”ことを理解する。

この“恋”の挫折感はカトリーヌの愛人願望を深めたようだ。

1961 年 10 月に出会ったロジェとの逢引 rendez-vous galant はカトリーヌにある種の心理的安定感を与えたようである。“正常な愛”とカトリーヌが評しているこの密会の場面はかなり詳細である。

> 私は落ち着いて、リラックスし、守られているかのようだった。彼が私に触れようとしたとき、私はすぐにこちこちになった。彼はそれ以上続けなかった。それから私は休むためにベッドに横になった。彼は私に近づき、唇にキスをした。これで私は不意にひどく興奮した。彼は注意深く私の服を脱がせ、自分自身の服を脱ごうとしたとき、突然とても遠慮深く、向きを変えて自分を見てくれと私に頼んだ。彼の体はかなり強靭な筋肉質で、そのなめらかな肌、その匂いさえも私は好きだった。私たちは激しく愛し合った。私の欲望は非常に大きく、ほとんど意識を失うほどだった。私は伝統的な体位で、正常に愛し合いたかったので、この意味で彼がすべてイニシアチブを取ったことは気に入らなかったが、想い出す限りこれほど“正常な”愛に快楽を覚えたことはない。かつてアランとの愛ではほとんど感じたこともないほどのものだったからだ。(『日誌』p. 503)

このロジェとは数週間後に再会し、今度はブーローニュの森で車中での火遊び中に覗き見されるという冒険も経験する。その後二人の関係がどのように進展したのかしなかったのかは、この『日誌』では定かではないが、いずれにせよカトリーヌはすべてをアランに報告している。二人の間の“ゲームの規則”に従ってカトリーヌはすべてを告白し、アランはそれに対して一瞬表情を変えるのだ。

11 月 3 日金曜日。私はマルシェに行った。前の晩の夕食以来何も話題にしていなかったのに、昼食中に突然アランがロジェとの午後はどう過ごしたのかと訊ねてきた。私は簡単に行きずりのホテルで彼と寝たと言った。アランの顔色が変わったのが見えた。彼は他にも詳しいことを訊ね、その後はもう何も言わなかった。それで私は、とても苦しいのではないか、何も言わない方がよかったのではないかと訊ねた。彼は断固として、彼に嘘をついては駄目だ、第一私が嘘を付くなどとは思ってもいないし、その点が彼が依然として私を信頼している点だと答えた。それから少しして、実のところそれはどうでも良いことだと付け加えた。次に読書をしに居間に腰を下ろした。外出するとき戸口で、私は彼に行ってきますと言い、低い声でまだ私を愛しているかと訊ねた。彼は優しく「分かっているじゃないか！」と答えた。その後は、アランはもう私の愛人のことをほのめかすことはなかった。私に対して、まるでなにごともなかったかのように、以前と同じように愛情深く、優しく、思いやりのある態度に戻った。私も何も言わない。暗黙の了解によってこの“アヴァンチュール”については話さない。たださっき偶然にいつ会うのかと訊ねられたので、答えた。それだけだった。（『日誌』p. 505）

このような日常を彩る“冒険”を試しながらも、カトリーヌの生活はアランを中心に展開して行く。彼らの性的欲求不満は日々の多忙さと、後年になると映画制作の協力の中で解消していくように思われる。そしてカトリーヌには日々の記録という自らに課した義務を遂行していくことになる。

《何故日誌を書くのか》

何故この日誌を書くのか、1959 年 6 月の日誌はこの点について当時の意図を語っている。先述のアランとの性生活省察の翌日のことである。

6月18日金曜日

（カトリーヌの勘違いか？ 実際には木曜日と考えられる）ポンパドゥール

（前段略）私は昨日、いや、一昨日書いたことを読み直してみた。私が書いたことのすべてが馬鹿げていて、面白くもなく、滑稽ですらある。何故この日誌をつけているのか？　先ず第一に備忘録であり、時間をはっきりさせる試みである。出来事の経過や日々の継続を完全に忘れてしまわないように、日々が何に使われてきたかを、つまり過去の時間割を知る試みである。それはまた年月の仮定的な要約を助け、印象を避けて、むしろ過去が空虚なものではなく、決して失われたものではないこと、何ものか、文字や文章でいっぱいの数冊ものノートに現れた何ものか、という偽りの印象を与えるのに役立つものである。勿論幻想である。これらすべてを10年、20年、あるいは30年後に再読すると多分面白いことだろう。多分祖母の家計簿のように感動させるものとなるかもしれない。

文学的に見れば価値は疑わしい。大体は完全な文章になっているが、下手な文だし、だがそれでも作文にはなっている。何故なのか？　備忘録ならば、単なるメモや幾つかの言葉で充分だろう。それだけのことだ。私はそうしない。何故なのか？　それは手紙のように書かれている。急いで、ペンの勢いに任せて書かれた手紙ででもあるかのように書かれた。だが誰に宛てた手紙なのか？　誰に宛られたものでもない。誰一人として一度もそのひとつの文章も読んだことがないし、それは読まれるためのものはないからだ。それは私宛の手紙なのだ、と思う。1959年のカトリーヌが終わりのない手紙を書き、1979年のカトリーヌが、長い間戸棚の中に置き忘れられた見知らぬ女の手紙を読むように読むことになるだろう。10年前に少女だった私が今の私にとって異邦人であり私を驚かせるのと同じように、10年後20年後の私は今の私にとって未知の女であり、あり得そうもないからこそ私は“彼女に”宛てて書くことができるのだ。

この日誌は私にしか読まれてはならないし、私だけに宛てられてい

るのだ。とは言え、あることをメモしないことや、いつか、偶然それが誰か別の人に開けられるのを恐れて、そのことをそれほど明け透けに言わないこともある。本当のところ、書き落としていることはほとんどないし、ただ私がもっと控え目なだけだからなのだが。私は間違っている。そんなことをしても何の役にも立たないのに。(『日誌』p. 171)

本稿では全く取り上げなかったアラン・ロブ = グリエを巡る多くのエピソードについても、またカトリーヌを取り巻く友人、知人たちとの逸話についても課題は山のようにあるが、以上に一部分だけ見た数節に、カトリーヌ・ロブ = グリエの生きた肖像が浮かび上がってくる。畢竟この書は、アラン・ロブ = グリエの補佐であり影である妻カトリーヌではなく、遭遇する多様な出来事と人々との関わりを受身に捉えるのではなく、それらに好奇心と献身で積極的に対処していこうとする魅力的な若い新妻のリアルな日常を描いて、半世紀を経た現在でも尚、私たち二十一世紀の女性に一定の方向性を示してくれていると考える。

2004 年のカトリーヌは後記“若き妻への手紙”の中で 1959 年のカトリーヌに次のように答えてこの日誌を閉じている。

親愛なるカトリーヌ

あなたの“終わりのない手紙”を私が読むのは 1979 年ではなく、それから 25 年後の 2004 年のことで、この手紙は戸棚ではなく私の屋根裏部屋に置き忘れられていました。

多くのことが変わり、多くの習慣が無くなってしまいました。1 日のかなめだったティータイムは随分前から無いし、1 週間の中心であるマルシェでの買い物もありません。特に家事はその重要性を失ってしまっています。家事については、あなたは未来の夫に先手を打って「私は、何も、何も、何もしないわよ」と宣言したのではなかったの？（彼をほくそ笑ませたあなたのお祖母様の“それこそ正真正銘小さな真珠”

という言葉に反発して言ったのでしたね）そうやって、何もしないで自由の状態で、あなたはせっせと働いて、あなたは良き小さな奥様になっていると思います。良い娘とさえ言ってあげます（パパやママンを愛し、左派に投票し、等々）。でもいずれにしても演じているわけではないのです。あなたは根っから、そしてある種有無を言わさぬ無邪気さで、一般に言われたり、考えられたり、約束事に属していると思われるようなこととは正反対のことを選ぶ傾向があるから、ナタリー・サロートよりもクロード・モーリアックの著作のほうがいいという立場をとったり、『24 時間の情事 *Hiroshima, mon amour*』（1959）は“知的過ぎる”と評したり、スタンダールをこき下ろしたり（以下省略）、悪く見られることになるわ。あなたは、あなたが疑っている人たちや、あなたの（私たちの）アランを厄介ごとに巻き込む人たちにも優しくない。ジェローム・ランドンを“頼りにならない”人（！）と批判したりしているけれど、それが間違っていることは未来が証明してくれるでしょう。あなたがミシェル・ビュトールやクロード・オリエ、その他の人たちに対してはっきり言っている、時として過剰な、そして多くの場合根拠のない激しい苛立ちについては、幸いなことに全くおさまっています。それにしても、こんな激怒については過ちを認めて公に遺憾を表明しなければならないですね。

一般的に言って、今の私にも、あなたのエロチックな興奮の探求や幼い性情、すぐに疲れるとか、“くたくたになる”といった面がありますが、もっと矛盾や不安が小さくなっていますし（例えば、“正常”と“異常”との境など）、また認知願望やあなたが“凡庸なボヴァリスム”と呼ぶものももうありません。

そのうち分かるでしょうが、あなたは予期できない、わくわくするような人生を送ることになるでしょう。急速に変化して行く世界を巡り続けることになるのです（列車で、船で、後になると飛行機で。とりわけ香港の町は見違えるほどです）。退屈することはないでしょう。それは約束済み。もう空虚の印象はもたないでしょう、それどころか

溢れそうな感じさえしますよ。あなたは自信をもって、従属するものから支配するものになり、心配しているのとは逆にそれと気づくこともない内に平穏に年老いていくのです。私はかつてあなただったし、あなたは今の私になるのですから。（『日誌』p. 568）

これが 2004 年 74 歳になったカトリーヌが 29 歳の自分自身に宛てた手紙である。

変革の二十世紀を怒濤のように駆け抜けた半世紀を振り返って、このように言い切ることのできる女性とその夫に幸多からんことを願うばかりである。

註

1） Catherine Robbe-Grillet, *Jeune mariée Journal, 1957–1962*, Fayard, 2004

2） Alain Robbe-Grillet, *Le voyageur Texte,causserie,et entretiens*(1947–2001) Éd.Christian Bourgois, 2001
Alain Robbe-Grillet, ,*Entretiens avec Benoît Peeters*, 2DVD vidéo, Les Impressions Nouvelles/IMEC, 2001
Alain Robbe-Grillet, *Le voyageur du nouveau roman Chronologie illustrée 1922–2002*, Éd. del'IMEC, 2002

3） Déclaration sur le droit à l'insoumission dans la guerre d'Algérie, dite "Manifeste des 121" septembre 1960 dans Vérité-Liberté, n°4
〈アルジェリア戦争における不服従の権利の宣言〉（121 人宣言）、1960 年。
当時の著名人 121 名がアルジェリア戦争下においてアルジェリア人民抑圧のための戦争に加担しない決意を表明し、署名した以下の宣言文から成る。
–Nous respectons et jugeons justifié le refus de prendre les armes contre le peuple algérien:
–Nous respectons et jugeons justifiée la conduite des Français qui estiment de leur devoir d'apporter aide et protection aux Algériens opprimés au nom du peuple français.
–La cause du peuple algérien, qui contribue de façon. décisive à ruiner le système colonial, est la cause de tous les hommes libres.
署名者の中には、サルトル、ボーヴォワール、ブランショ、ブルトン、

サガン、ツアラ、トリュフォーをはじめ当時ミニュイ社を中心に「ヌヴォー・ロマン」と総称され始めていた作家たち、デュラス、サロート、ビュトール、シモン、ロブ＝グリエ、そして主幹のジェローム・ランドン、ヴェルコール等の名前も見られる。

4） Jean de Berg, *L'Image*, Éd.de Minuit, 1956

5） 2001 年 10 月に刊行された *Magazine littéraire* 402 号のインタビューの中では、カトリーヌは 2 人の“（性的）幻想世界 univers fantasmatiques”の交錯について次のように語っている。

私があの人に出会った時、私にはこの世界への心構えができていたのです。彼は以前の恋愛の中で相手に探りを入れ、ファンタスムについて話そうとしたことがあったそうです。ところが、不信感と冷笑、無理解にしか出会いませんでした。私はすぐに関心をもち、彼の性的幻想をスノビズムだとかポーズだとはとらず、真面目なものと考えました。私には適した素地があり、あとは種を蒔くだけだったからです。それでもアランが私の先導者でした。『イマージュ』は彼が私に書くよう後押しをしてくれた最初の本ですが、二人で経験したことをそっくり写したものです (中略) 私たちは枠にはまったノーマルな夫婦生活は送って来ませんでした。私たちは“カトリック的な”夫婦ではありません……もっとも私が受けた宗教教育は非常に大きな影響を残していますし、エロチックな演出の中でも昔の儀式的な華麗さを保って来ましたが、聖櫃の中は空っぽなのです。エロチスムは私の中ではもっと宗教的なものですが、アランは全く非宗教的な環境の出ですし、更に言えば、実行よりもずっと幻想と頭の中で生きているのです。一部分は私としたこと全部ですが、彼が本の中で述べていることの頂点までは達していません。それこそがファンタスムとして残るのですから。

Rendez-vous avec Catherine Robbe-Grillet, propos recueillis par Valérie Marin La Meslée, in *Magazine littéraire, Alain Robbe-Grillet la Reprise du Nouveau Roman*, N° 402 octobre 2001, p. 38

6） Jeanne de Berg, *Cérémonie de femmes*, Grasset, 1985

7） Catherine Robbe-Grillet 上掲書、p. 449–493.

8） 同上、p. 330–351 及び p. 557–561.

9） Rendez-vous avec Catherine Robbe-Grillet, 上掲記事 p. 36.

10） Alain Robbe-Grillet, *Les derniers jours de Corinthe*, Éd. de Minuit, 1994, p. 14–15.